

3. コーンビーム CT で歯性上顎洞炎所見を有する者の疫学的検討

An epidemiology Study of Odontogenic Maxillary Sinusitis Diagnosed by Conebeam CT

○東海林 理, 泉澤 充, 佐藤 仁,
星野 正行, 高橋 徳明, 六本木 基,
田中 良一

岩手医科大学歯学部口腔顎顔面再建学講座
歯科放射線学分野

【目的】 歯性上顎洞炎は歯の根尖病巣, 歯周炎, 根管治療中のリーマーなどの突出による感染, 抜歯時の洞底穿孔などの歯科的外傷による歯性感染に起こる。

近年コーンビーム CT が上顎洞疾患の検査にも使用されている。コーンビーム CT で得られる画像は空間分解能が高く, 歯性上顎洞炎の病態が描出できる。今回我々は, コーンビーム CT を用いて上顎洞の検査を行い歯性上顎洞炎と診断された症例について, その背景因子, 画像所見の特徴および病変分布等を明らかにするために, 上顎洞炎の併発の無い歯根嚢胞症例と比較検討を行った。

【対象と方法】 対象は 2013 年 2 月から 2017 年 8 月までの間に頭部用コーンビーム CT 装置を用いて撮影し歯性上顎洞炎と診断された 127 例である。比較対象として 165 例の歯根嚢胞患者のデータを収集し, 年齢, 性別を用い傾向スコアマッチングにて対照群の抽出を行った。最終的に歯性上顎洞炎の発症のある群とない群で, 各群 127 例ずつ計 254 例にて検討を行なった。

比較検討項目は腫脹・疼痛などの症候の有無, 病変の左右差, 洞口腔瘻の有無, 歯根破折の有無, 根管充填の状態, 歯種である。歯種は切歯, 犬歯, 小臼歯, 大臼歯に群分けした。

【結果】 症状の有無では歯根嚢胞群で有意に症状を有したものが多く, 歯性上顎洞炎群では無症候の症例が多かった。歯根破折群, 洞口腔瘻群, 根管充填不良群は歯性上顎洞炎群で有意に多かった。また, 歯種では, 歯根嚢胞の発生は切歯に多く, 歯性上顎洞炎では大臼歯での発生が有意に多かった。

【結論】 今回の調査では無症候性の症例が有意に多く見られた。種々の原因により形成された歯性上顎洞炎が慢性化しているためと考えた。また, 歯性上顎洞炎は従来の報告同様に大臼歯を責任部位とするものが多かったが, 根管充填不良例に多く見られることが明らかになった。

4. ショートインプラント上部構造装着後 3 年経過症例に関する臨床的調査

Clinical survey of three years prognosis after the placement of the superstructures on short implant

○池田 功司, 小山田 勇太郎, 野尻 俊樹,
菅原 志帆, 福德 暁宏, 折祖 研太,
横田 潤, 畠山 航, 高藤 恭子,
高橋 敏幸, 鬼原 英道, 近藤 尚知

岩手医科大学歯学部補綴・インプラント学講座補綴・インプラント学分野

目的: インプラント体埋入手術時には解剖学的要因または, 骨移植等の外科的侵襲を回避するためにショートデンタルインプラント (SDI) がしばしば使用される¹⁾。今回, SDI を適用し, メンテナンスへ移行した症例の調査, 検討を行ったので報告する。

対象と方法: 調査期間は 2009 年 7 月から 2018 年 7 月までとし, 被験者は当科にて SDI 埋入, 上部構造装着後 3 年以上経過している患者とした。今回は, 長さ 7mm 以下を SDI と定義した。各項目に関し調査した。

結果: 抽出された患者は 58 名 (男性 20 名, 女性 38 名) であった。埋入されたインプラント体は 79 本であった。上部構造はブリッジが 13 例, 連結冠が 31 例, 単冠が 17 例であった。骨移植を行ったのは 46 本であった。術後トラブルは上部構造の破損が 13 例, インプラント周囲炎が 1 例, インプラント周囲炎による除去が 2 例であった。

考察および結論: SDI の使用は骨吸収に起因する問題の解決につながる事が示された。しかし, 埋入時にインプラント体頸部への骨移植を必要とした例が多く認められた。しかしながら, 骨採取量の低減したことにより, 侵襲の軽減が

可能であると考えられた。今回の調査の結果、3年経過としてインプラント体の約97%が生存し、その多くが良好な経過を示していることから、短期の臨床使用に関しては問題無いことが示唆された。(本研究は本学倫理委員会(倫理委員会番号:12000018)の承認のもと行っている。承認番号01272)

1) Nisand, D., Picard, N. and Rocchietta, I.: Short implants compared to implants in vertically augmented bone: a systematic review. Clin Oral Implants Res 26 Suppl 11: 170-179. 2015.

5. 歯科用コーンビームCT検査により過剰歯と癒合歯を鑑別診断した2例

Two cases in which supernumerary tooth and fused tooth were differential diagnosis by dental cone beam CT

○鈴木 舟, 齋藤大嗣*, 金 将*,
小泉 浩二*, 宮本 郁也*, 高橋 徳明**,
泉澤 充**, 山田 浩之*

岩手医科大学卒業臨床研修センター, 岩手医科大学歯学部口腔顎顔面再建学講座口腔外科学分野*, 岩手医科大学歯学部口腔顎顔面再建学講座歯科放射線学分野**

緒言: 上顎大臼歯部の癒合歯は比較のまれであり, 通常のX線画像検査では癒合状態の詳細な観察は困難である。今回われわれは歯科用コーンビーム(CB)CT検査にて過剰歯と癒合歯を鑑別診断した2例を経験したので報告する。

症例1: 患者は26歳の女性で, 左側上顎第二大臼歯頰側に位置する過剰歯の抜歯目的に当科を紹介され受診した。CBCT検査を行ったところ左側上顎第二大臼歯と連続性を有する歯牙様硬組織を認めた。癒合歯と診断し抜歯を行わなかった。
症例2: 患者は30歳の男性で, 左側下顎智歯および右側上顎過剰歯の抜歯目的に当科を紹介され受診した。CBCT検査にて, 右側上顎第二大臼歯と歯牙様硬組織との連続性が認めなかったため, 過剰歯と診断し抜歯した。

考察: 症例1および2ともに, 視診による過剰歯と癒合歯の鑑別は困難であった。デンタルフ

ロスあるいはコンタクトゲージにて歯冠の分離を確認し得た場合でも, 歯根部での癒合の否定は困難である。過剰歯の診断のもと, 癒合歯への抜歯操作による歯根破折の可能性があるため, 抜歯前のCBCT検査による診断が重要だと考えられる。

結論: 過剰歯の診断においては, 近接する永久歯との癒合や癒着の可能性を想定し, CBCT検査を行うことが重要である。

6. 抜歯を契機に特異的な骨吸収を呈した下顎骨骨髓炎の2例

Two cases of mandibular osteomyelitis with specific bone resorption triggered by tooth extraction

○小原 瑞貴, 山谷 元気, 高橋 美香子,
阿部 亮輔, 小松 祐子, 宮本 郁也,
山田 浩之

岩手医科大学歯学部口腔顎顔面再建学講座口腔外科学分野

【緒言】われわれは, 慢性下顎骨骨髓炎が抜歯を契機に急性化し, 著明な骨吸収を生じた2例を経験したので報告する。

【症例1】68歳男性。47歯肉腫脹の精査加療依頼で当科受診。消炎後47, 48抜歯術施行。骨性癒着のため48歯根を残存させた。術後4か月で下顎下縁まで達する骨吸収と腐骨分離を認めた。慢性硬化性骨髄炎の診断で, 全身麻酔下にて不良肉芽掻爬, 周囲骨削除, 48残根抜歯術を施行。術後8か月で経過良好である。

【症例2】70歳男性。当科にて37, 38抜歯術を施行。術後2か月で腐骨分離と皮質骨の吸収を認めた。慢性硬化性骨髄炎の診断で, 全身麻酔下での腐骨除去術, 周囲骨削除術を施行。術後8か月で経過良好である。

【考察】術前より骨硬化像を認めており, 慢性硬化性骨髄炎が抜歯後急性化したため骨吸収が生じたと考えられた。硬化した骨は高齢者に多く, 抜歯には注意が必要である。